

第2回「海軍の歴史勉強会」要旨
—太平洋戦争Ⅱ（米軍の二つの反攻線）—

1 昭和18年の停滞

ガダルカナル戦とポートモレスビー作戦の反動で機動部隊は影を潜め、太平洋で唯一の激戦場となったニューギニア戦においても陸軍部隊第81輸送作戦の失敗で脆くも崩れ去った。もはや、海戦に代わる基地航空戦が台頭しており、日本機の限界が露呈して来る。

2 ラバウル航空隊とニューギニア・ソロモンをめぐる戦い

ソロモン・ニューギニア方面は、米豪軍の反攻線に近接し準最前線基地化し、島嶼部航空基地においては、航空隊の根拠地化と対米豪航空隊直接対峙の最前線と化して行く。島嶼航空戦は激化し、搭乗員・機材の消耗は、太平洋の主戦場化を示すと共に南方戦場の象徴と成る。この時期の「い」号作戦と「ろ」号作戦においては、陸軍航空隊との協同作戦を全く考慮せず、第1航空戦隊を南東方面に投入したことを軍令部は関知もしておらず、加えて過大戦果報告を鵜呑みにする等、高い損耗率を被り現機種では戦えない段階に達していた。航空戦力はたえず能力が向上した航空機の更新を不可欠とした。航空機更新の立ち遅れには、日本近代化の過程において、航空機産業の発達基盤をなす外燃機関時代から内燃機関時代へのインフラの遅れが注目される。

3 昭和18年唯一の戦場ニューギニアでの戦況推移

マッカーサー軍は、ニューギニア戦での経験を基に、航空機の世代交代を図り、陸軍機が魚雷等による艦船攻撃をする等、徹底した航空重視を実現し攻勢を掛けて行く。フィンシュハーフェンの戦いにおいては、陸海空戦力の一元的運用により火力を集中させる等、三位一体の攻撃を実施する等、フィリピン進攻を視野に入れ、日本軍無視の本格的飛び石作戦を決行して行くこととなる。

4 二つの米軍の反攻

マッカーサー（マ）軍は、次の島へステップ進攻するため島嶼奪取・飛行場建設を目論んでいたが、S17末より1年半以上かけて3Nを越えられずにいた。一方、ニミッツ（ニ）軍の米機動部隊は、再建と慣熟訓練のため、S17.10.28~18.11.19姿を見せずにいたが、新しい進攻作戦様式により、ハワイ・米本土方面より出撃・集結して突然機動部隊の来襲を図り、一気に制空権・制海権を奪取してから上陸作戦を実施するものへと変化していた。このため、奪取した島を次の進攻への足掛かりにしないため、飛び石作戦とは言えないものへと成っていた。一方、帝国海軍はラバウル航空隊の撤収を図り、自ら関所を開放しトラック島への移動を発令する。

ここで、マ軍ルートは、飛び石・蛙跳び作戦であり少ない犠牲で日本軍の多数を蹴散らすものであったが、ニ軍ルートは、強襲強引陸上作戦であり多

くの犠牲を伴うが日本軍を全滅させるものであった。この違いが、本来二軍が日本を管轄していたのに対し、いつの間にか、マ軍が対日本戦の指揮権を持つことになった理由の一つではないかとも思われる。

5 日本軍の崩壊

大本営等は、米軍の反攻に二つのルートが存在を徐々に認識するも、二つの米軍に別々の防戦計画を立てず、次第に、左右に翻弄（ビアク島戦に「渾」作戦、マリアナ戦に「あ」号作戦）されて行く。マリアナ海戦においては、連合艦隊司令長官古賀峯一が戦死(S19.3.31)してから、豊田副武(S19.5.3~20.5.29)が任官する迄の間約1.5か月を要した。この間、連合艦隊司令長官の代理的役割を南西方面艦隊司令長官高須四郎大將が担ったためか、1航艦、14航艦、23航戦を中部太平洋方面艦隊司令長官の指揮下より除外し、南西方面艦隊司令長官の指揮下に置き、航空隊を中部太平洋から南西方面に移転させ復帰しないものが多かった。南西方面艦隊司令部では連合艦隊の指揮は無理であり、西に傾き過ぎが在り特に航空兵力の西移動を、中沢軍令部第一部長は懸念していた。更に、台湾沖航空戦(S19.10.12-15)においては、航空作戦の戦果検証が最早困難となっており、誇張戦果が為されフィリピン戦へ甚大な悪影響を与えることと成る。

6 敗戦処理への旧海軍貢献

ポツダム宣言受諾時、敵味方に物理的大きな距離があり、降伏に時間があったため、記録が多く処分されたため当該部隊の行動に関する根拠は希薄となる。これはドイツが降伏した際に、陸続きであったため多くの記録が残されたことと対照的であった。

旧海軍は、米軍による日本占領の環境整備として、機雷除去と武装解除に貢献することと成った。また、復員（解員）・引揚げを短期間に実施することとされたが、海外に残った兵員・邦人は660万人（兵員330万、法人330万）で、米方針は、当初、兵員は早期帰還、邦人(民間人)は移民扱いで帰還対象外であったものの、その後邦人が大挙移動したため、兵・民同時に引き上げとなり、主に鎮守府施設（海兵団兵舎、検疫施設、軍需部物品等）の活用を図ることとなった。帰還船は、第二復員省所管172隻・船舶運営会所管55隻を要し、期間は4年以上の見込となったため、米リバティー船・LST等206隻の貸与(S21.7 現在)を受け、昭和21年度末までに復員・引揚げ員数が5百万人を突破することとなった。（次頁講話資料に続く）

太平洋戦争Ⅱ (米軍の二つの反攻線)

H.Tanaka

1. 昭和18年の停滞

ガダルカナル戦とポートモレスビー作戦の反動→影を潜める艦艇(資料1)
機動部隊の逼塞；南太平洋海戦(S17.10.26)～マリアナ海戦(19.6.19)
ニューギニア戦……陸海統帥部が約束した反転攻勢、太平洋で唯一の激戦場
太平洋方面最大の陸軍部隊編成、第81輸送作戦の失敗
海戦に代わる基地航空戦……台頭するラバウル海軍航空隊群
陸軍航空部隊も大挙ニューギニア進出、「い」号作戦、「ろ」号作戦
日本機の限界……米軍新鋭機の登場と米陸軍航空隊の優勢
日本の航空産業の後進性露呈→第2、3世代交代の困難

2. ラバウル航空隊とニューギニア・ソロモンをめぐる戦い

- ①ソロモン・ニューギニア方面分岐点…人員補充・物資補給の一大根拠地化
米豪軍の反攻線に近接し準最前線基地化
南東方面艦隊、第4・9艦隊、24・25航戦、第17・18軍、第8方面軍
人員・物資・航空部隊の配送基地
内地・大陸→再編、配送地決定→ニューギニア・ソロモン方面の前線
島嶼部航空基地網の中枢
ニューギニア方面；ラエ、ウェワク、マダン、ハンサ、ブーツ等
ソロモン方面；ガ島、ツラギ、ブイン、バラレ、カビエン等
航空隊の根拠地化と対米豪航空隊直接対峙の最前線化
島嶼航空戦の激化→基地機能の強化、空戦の最前線基地化、
S17.12のラバウル海軍航空隊；701,702,703,705,752,753,755空
S18.2頃ブーゲンビル・ブインに201,204,582空進出
S18.3頃から陸軍航空隊進出→第6・7航空師団、第4航空軍
搭乗員・機材の消耗→太平洋の主戦場化、南方戦場の象徴

- ②「い」号作戦と「ろ」号作戦……ラバウル航空隊群の作戦、海軍のみで遂行
「い」号作戦(18.4.7-4.14)…基地航空戦力で戦況転換、第81号作戦報復
実際の作戦と結果

月日	攻撃先	参加兵力	米軍報告損害
4.7	ガダルカナル 方面	戦158 艦爆69	駆逐艦1, コルベット1 油槽艦1, 飛7
4.11	ニューギニア オロ湾	戦72 艦爆21	商船1, 同大破1, 掃海艇1, 飛10

4.12	ポートモレスビー	戦 131、陸攻	戦 21
4.14	ニューギニア・ラビ	戦 131、艦爆 23	輸送艦 1, 同中破 1

※米側資料；損害損失小→航空攻撃の戦果確認の困難
 連合艦隊司令部報告；「ガ」島方面ニ相次ギ「ニューギニア」方
 面航空作戦ハ敵ノ意表ヲ衝キ大ナル打撃ヲ与ヘ敵ノ反抗
 企図ヲ防遏 → 目標が見つからないので中止

「ろ」号作戦(18.10.27-11.13or17)……ブーゲンヴィル方面航空戦
 第1航空戦隊飛行機隊を南東方面投入、軍令部関知せず

第1次(11.5)	過大な大本営発表(空母5隻撃沈)
第2次(11.8)	真珠湾以来の大戦果発表
第3次(11.11)	艦爆無力化；速力・搭載力弱体
第4次(11.13)	大戦果発表
第5次(11.17)	大戦果発表

※過大な戦果報告；搭乗員報告鵜呑み、戦果精査の向上怠る

高い損耗率……開戦時と変わらぬ機種では戦えない段階

機種	艦戦	艦爆	艦攻	艦偵
機数	52%	84%	85%	100%
搭乗員	30%	74%	46%	100%

※日本の機種更新進捗せず、航空技術の限界

※陸軍航空隊との協同作戦をまったく考慮せず

③航空機更新の立ち遅れの背景

日本機；低馬力・小搭載力・低メンテナンス力、海軍機で基地航空隊
 空母機と陸攻機で形成（零式、一式、九七艦攻、九九艦爆）

米軍機；大馬力・大搭載力・重武装・陸軍機で基地航空隊形成

P47, B17, B25, B24, A20 等の戦闘爆撃機・爆撃機主体

近代社会牽引力=エンジンの推移……蒸気→自動車→航空機

外燃機関（レシプロ式～タービン式）……汽船、蒸気機関車

一点生産方式(一品生産)の製造、大型に必要な精度、少ない部品

日本が欧米に短期間に差を縮めることができた要因

内燃機関（ガソリン・ディーゼル）……自動車・飛行機機関

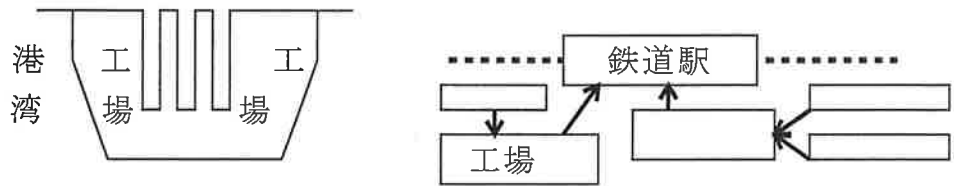
内燃機関特徴：小型高出力・高速回転…ギア、クラッチで制御

ベアリング、ピストンリング、パッキング、バネ部品役割大

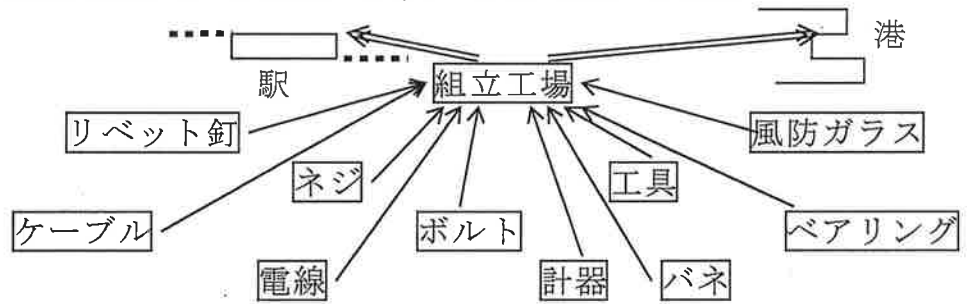
製造に高い精度要求→高いレベルの機械産業不可欠

多種多数の部品・部位→「規格」の価値・重要性増大

早い消耗・摩耗→メンテナンスの重要性大
 機械工業発達を背景 → 精密機械産業の発達必須
 精密工作機械工業の発達……小型歯車機能の拡大
 クランク軸・フライス・タレット・ブローチ・VDF旋盤等
 精密計測機械工業発達…光学測定機器・電気測定機器
 工具材料；タングステン・カーバイト鋼超硬合金の高速切削
 〈外燃機関時代の工場立地〉 港・鉄道駅周辺に集中



〈内燃機関時代〉各種生産単位の長大な裾野状形成



部品工場間流通体制形成、道路・トラック利用

[昭和初期日本の諸車保有台数]

年	乗用馬車	馬車	牛車	荷車	自転車	乗用車	トラック	人力車
S5	2,175	308,914	98,690	1,807,788	5,779,297	57,827	30,881	42,635
S6	1,545	296,560	94,960	1,752,962	6,000,450	62,419	34,837	36,618
S7	1,557	297,918	93,445	1,690,596	6,356,157	64,282	35,939	32,026
S8	1,433	302,164	97,417	1,627,658	6,524,028	66,733	38,199	27,071
S9	1,320	299,702	101,041	1,565,936	6,895,256	70,481	42,059	23,247

(『日本長期統計総覧』、『明治・大正期日本経済統計総覧』)

[日本の道路整備の実情] ……戦前の道路舗装率

年度	総道路延長	舗装延長	舗装率	国道実延長	舗装率
S11	906,003km	8,394km	0.93 %	8,609km	13.90 %
S12	906,105km	9,503km	1.05 %	8,615km	15.04 %
S13	915,322km	10,065km	1.10 %	8,617km	16.11 %
S14	924,521km	11,404km	1.23 %	8,730km	16.59 %
S15	939,539km	11,905km	1.27 %	8,740km	18.32 %
S16	927,085km	11,541km	1.24 %	8,739km	18.90 %

(内務省「土木局第30回統計年報」後編)

モータリゼーション立ち遅れが意味するもの

内燃機関発達立ち遅れ＝機械産業の後進性、中世的道路網

低い生産技術→大量生産方式未発達

高精度製造技術・部品管理の未発達

外燃時代；一品生産による軍事大国化

内燃時代；大量生産・高精度生産できない見せかけ軍事大国

※技術的に日本は二流国に転落（軍事面でも二流国化）

いびつな日本の近代化と総力戦に対応できない国情

モータリゼーションなき軍事大国の不思議；

まともな自動車も生産できず→飛行機ができる不可解

道路網の極端後進性；部品の広範囲流通による大量生産困難化

※遅れた社会インフラ→総力戦における弱点化

軍事大国日本；軍事面のみの進化が突出したいびつな社会構造

一見すると強国、実態は穴だらけの脆弱国家

3. 昭和18年唯一の戦場ニューギニアでの戦況推移

マ軍の攻勢 ……ニューギニア戦（ジャングル海の島嶼戦）で経験蓄積

徹底した航空重視；Kennyの第5空軍が実行部隊→戦況支配

戦況の進展とともに航空機の世代交代

日本機を圧倒する搭載量・火力、強靱な機体

米陸軍機が魚雷等による艦船攻撃→制海権獲得実現

a. 両統帥部長によるニューギニアでの巻き返し約束

ガ島・ポートモレスビー戦後反攻→ニューギニア方面で反攻約束

※ダンピールの悲劇(S18.3.3)…日本軍巻き返し作戦のつまずき

→日本海軍航空隊の「い」号作戦に発展

※基地航空戦への展開…長期連続作戦→補給補充必須→消耗戦化

補給が基地航空戦左右…安全な遠隔地揚陸→沿岸輸送

飛行場造成能力が作戦に影響…設営隊・設定隊の奮闘

b. フィンシュハーフェンの戦

第4航空軍壊滅的打撃(S18.8.17-9)→米軍側に制空権渡る

制空権内で日本軍背後に進出→飛び石作戦・蛙跳び作戦の開始

制海権奪取にともない小艦艇で地上軍支援

※マ指揮下の南西太平洋艦艇→43.3.15第7艦隊に発展

三位一体の攻撃…陸海空戦力の一元的運用(火力の集中)

島嶼戦…陸・海・空の三戦力が戦闘参加可能の条件

成立条件…横の連携可能体制、三軍間の通信能力

たまたまは南西太平洋軍；三者の戦力の集合体
18 末まで陸上兵力は豪軍主体、突出した戦力なし
c. マヌス、アイタペ、ビアク、サンサポール、モロタイ上陸(19.2 ～)
飛び越し距離拡大→本格的飛び石、フィリピン進攻を視野
航空基地建設適地占領を目的 → 陸上戦闘回避(日本軍無視)
ブ島、マダン、ウェワク等日本軍を置き去り
航空基地巨大化→制空権獲得を超越、戦局支配
比島戦→ミンダナオ上陸からレイテ上陸への変更
南方資源地帯・ミンダナオ置き去り→最大飛び石作戦
第7艦隊に戦艦・護衛空母配属→飛び石作戦高速化
アイタペ戦；ニューギニア・南太平洋における最後作戦戦闘

4. 二つの米軍の反攻

マ軍；島嶼奪取・飛行場建設→次の島へステップ進攻

S17 末より 1 年半以上かけて 3 N を越えられず

ニ軍；米機動部隊、S17.10.28 ～ 18.11.19 姿見せず、再建と慣熟訓練

(日本機動部隊；S17.10.28 ～ 19.6.19 の間姿見せず)

新しい進攻作戦様式；ハワイ・米本土方面より出撃・集結

→突然機動部隊来襲 → 一気に制空権・制海権奪取→上陸作戦

※奪取した島を次の進攻への足掛かりにせず→飛び石に非ず

①米太平洋艦隊と海兵隊の再建(S17.10 ～ S18 末)

機動部隊、戦艦・巡洋艦群、上陸部隊群の組み合わせ

エセックス空母主力・諸空母から成る機動部隊

艦載機の航空管制と多数機の同時運用→分厚い防空傘と鋭い矢

戦艦・巡洋艦群；空母護衛と上陸地艦砲射撃の役割

海兵隊；新役割の発見、新型上陸用舟艇を使い上陸作戦の花形

②新米機動部隊の本格的運用；44 年初頭

ギルバートのマキン・タラワ上陸作戦(S18.11)→旧式上陸用舟艇で苦戦

地中海作戦終了に伴い大挙新型上陸用舟艇の太平洋廻航

マーシャルのクエゼリン、ルオット、ナムル上陸作戦(S19.2)で本格化

ニミッツ隷下の太平洋方面軍の北上作戦の開始

マーシャル諸島→マリアナ諸島→硫黄島→沖縄へと北上

二つの対日反攻線の形成……マ・ルートとニ・ルートの登場(資料 2)

③海軍ラバウル航空隊の撤収(S19.2.17 ～ 24)……自ら関所の開放

米機動部隊、トラック島大空襲(S19.2.17-8)

→連合艦隊、東京からラバウル航空隊にトラック移動命令
開戦以来、ラバウルの役割絶大→海軍首脳部、トラックを重要視
海軍首脳、戦争全体の構図見えず、何を見てきていたのか
マ軍、マヌス島占領(2.29)→ビスマルク海進出、比島まで障碍無
3 N線崩壊…ホランジア・アイタペ(4.21)→サルミ (5.17)
→ビアク島(5.27)→サンサポール(7.31)→モロタイ(9.15)
→レイテ島(10.17)

④マ・ルートとニ・ルートの北上と評価

まったく異なる2つの作戦様式

マ・ルート……飛び石・蛙跳び作戦→少ない犠牲、日本軍多数

ニ・ルート……強襲強引上陸作戦 →多い犠牲、日本軍全滅

第二次大戦米軍戦死者数；41万(ヨーロッパ30.5万、太平洋10.5万)

太平洋方面戦死者10.5万のうち

(米軍戦死者)マ・ルート； 30,200人、ニ・ルート； 74,800人

(日本戦死者)マ・ルート；概数725,000人、ニ・ルート；概数235,000人

5. 日本軍の崩壊

大本営等；米軍反攻に2つのルートの存在を徐々に認識

2つの米軍に別々の防戦計画を立てず→左右に翻弄

※ビアク島戦に「渾」作戦 → マリアナ戦に「あ」号作戦

①マリアナ海戦の問題点

連合艦隊長官古賀峯一戦死(S19.3.31) → 豊田副武(19.5.3 ~ 20.5.29)

連合艦隊長官代理的役割(3.31 ~ 5.3)…南西方面艦隊長官高須四郎大将

連合艦隊電令作第46号(4.12)

一、敵ハ「ニューギニヤ」北岸方面ニ大規模ナル攻略作戦ヲ企図

スル算極メテ大ナリ 此ノ場合敵ノ作戦要領ヲ左ノ如ク判断ス

二、連合艦隊ハ友軍ト協力「ニューギニヤ」北岸ニ対シ新ニ予期

セラルベキ敵ノ大規模ナル上陸作戦ヲ邀撃 努メテ之ヲ海上ニ

撃滅以テ企図ヲ破碎セントス

1 航艦、14 航艦、23 航戦を中部太平洋方面艦隊長官の指

揮下より除外→南西方面艦隊長官の指揮下に

航空隊を中部太平洋から南西方面移転、復帰しないもの多し

中沢軍令部第一部長の懸念の配慮

南西方面艦隊司令部では連合艦隊の指揮は無理

西に傾きすぎる懸念、特に航空兵力の西移動を懸念

あ号作戦予想参加航空兵力比

国	空母機	基地機
日本	473	520
米国	956	10

日本、基地航空隊頼み

マレー沖海戦後、基地航空隊が米艦隊に打撃を与えた形跡なし

机上の第1航空艦隊長官角田覚治の麾下部隊

第61航空戦隊	テニアン	戦 360, 爆 192, 攻 72, 偵 48
第22航空戦隊	トラック	戦 336, 爆 48, 艦攻 48, 攻 96
第23航空戦隊	ケンダリー	戦 48, 攻 96, 偵 24
第26航空戦隊	ペリリュー	戦 144, 爆 48, 攻 48,

半分も戻らずペーパープラン→基地航空隊、戦闘開始前に壊滅

②台湾沖航空戦(S19.10.12-15)の影響

a. マ軍の比島攻略に米海軍協力→機動部隊で周辺軍事施設に恒久的損傷
大本営発表(S19.10.16)……未曾有の大勝利

轟撃沈；空母 11、戦艦 2、巡洋艦 3、ほか 1
撃破；空母 8、戦艦 2、巡洋艦 4、ほか 14
撃墜；112機 (我が方損害 312機)

実際の損害……基地航空隊の全滅、微々たる戦果

米軍；空母損傷 1、重巡 1、軽巡 1、航空機 89機
日本軍；航空機 395機 (残存 34機)

航空作戦の戦果検証の困難

「い」号作戦・「ろ」号作戦以来の課題

戦果報告を精査しない体質、航空戦は個人戦の性質
誇張戦果；戦意・士気高揚効果重視、次作戦への影響顧慮せず
※強すぎる「決戦」思想、作戦術思想の欠如

b. フィリピン戦への影響

第14方面軍設置(7.28)；14軍昇格し司令官黒田重徳

山下、突如親補(9.26)→ルソン着任(10.6)→米軍上陸(10.17)

台湾沖航空戦大勝利…大本営、比島戦決戦場をルソン→レイテ変更

秦次長、服部課長マニラ出張→台湾沖航空戦に伴う作戦変更

レイテ決戦に変更…山下反対、寺内南方軍司令官賛成

1・26師団、独混58旅団、戦車師団等→海上輸送で無駄死

山下、長期抗戦命令(12.25)…ルソン決戦不可と判断

全軍を3軍分割、最初より長期持久抗戦に徹す

※ルソン戦を太平洋戦争「天王山」→最初より持久抗戦

c. 連合艦隊司令部；「捷一号及び捷二号作戦警戒」発令

米艦隊多数沈撃破のあと→「撃滅」を確信

きわめて精緻・複雑で多数の目的を持った芸術的作戦計画

精緻な計画；高い実施能力・条件必要、小異変で全体変動

多数の目的；計画通りの進捗と運が必要、すべて駄目の公算大

計算外異変の想定不可欠、何もないのが異常

③本土決戦の不思議

日本軍の伝統・水際戦闘 → 南太平洋で米軍の艦砲射撃不可能

ペリリュー・硫黄島・沖縄戦；縦深戦で大きな戦果

大本営、牛島の縦深戦指導を批判(20.4)→伝統的水際戦に回帰

「第1総軍決戦要綱」(20.7.16)

1. 本土作戦は攻撃作戦であり、水際撃滅である。

6. わが攻勢の根本は敵の上陸初動を制して敵を終始水際付近に
圧倒して撃滅するにある。堅固な橋頭陣地を攻撃するに至る
ことをなからしめる。

第12方面軍の作戦指導

田中司令官の方針……主陣地の前方推進、汀線陣地の強化

「敵を上陸させてはだめだ。海岸陣地の部隊は砲爆撃によっ
て相当の損害を受けるであろう。しかし生き残った者が敵
と刺し違える」

6. 敗戦処理への旧海軍貢献

ポツダム宣言受諾時；敵味方に大きな距離→降伏に時間、記録の処分

G H Q及び占領軍……マッカーサーと第6軍・第8軍の怪

※オリンピック作戦→第6軍、コロネット作戦→第8軍

①日本占領の環境整備

機雷除去(日本機雷=係維式、米軍=感応式)

武装解除；航空機鹵獲・資料→米で調査分析、近未来性皆無に驚き

艦艇処分、特別保管艦232隻、うち150隻賠償艦(引渡92隻)

鎮守府・軍港引渡→米海軍の根拠地化

②復員(解員)・引揚げの短期実施

海外に残った兵員・邦人……660万(兵員330万、邦人330万)

米方針；兵員早期帰還、邦人移民扱いで帰還対象外(邦人大挙移動)

主に鎮守府施設活用…海兵団兵舎、検疫施設、軍需部物品等の活用

帰還船；第二復員省所管172隻・船舶運営会所管55隻→4年以上見込

米、リバティール船・L S T等206隻貸与(S21.7現在)

昭和21年度末までに5百万人突破

資料

昭和十八年の戦艦及び重巡洋艦行動概要

軍艦名	昭和十八年行動概要
戦艦金剛	トラック→佐世保→呉→トラック→横須賀→ブラウン環礁→トラック→佐世保
戦艦榛名	トラック→佐世保→呉→トラック→横須賀→トラック→ブラウン環礁→トラック→佐世保
戦艦扶桑	呉→トラック→ブラウン環礁→トラック
戦艦山城	柱島→横須賀→呉→宇品→トラック→徳山→柱島→横須賀
戦艦大和	トラック→柱島→呉→トラック→横須賀→トラック→呉
戦艦武蔵	呉→トラック→木更津→横須賀→呉→トラック→ブラウン環礁→トラック
重巡愛宕	呉→トラック→横須賀→トラック→ブラウン環礁→トラック→ラバウルで損傷→トラック→横須賀
重巡高雄	トラック→横須賀→トラック→ブラウン環礁→トラック→ラバウルで損傷→トラック→横須賀
重巡羽黒	トラック→横須賀→佐世保→呉→トラック→ブラウン環礁→ブーゲンビルで交戦→ラバウル→トラック→佐世保→呉→トラック
重巡鈴谷	カビエン→トラック→呉→横須賀→呉→トラック→ラバウル→トラック→ラバウル→トラック→ラバウル→トラック→ラバウル→トラック
重巡能野	カビエン→トラック→呉→横須賀→呉→横須賀→トラック→ラバウル→トラック→ラバウル→ロンバンガラ→ラバウル→トラック→呉→トラック→クエゼリン→ルトオット→トラック→カビエン
重巡利根	トラック→ヤルト→トラック→舞鶴→呉→トラック→横須賀→呉→トラック→ラバウル→トラック→ブラウン環礁→トラック→ラバウル→トラック→ラバウル→トラック
重巡筑摩	呉→トラック→横須賀→呉→トラック→ブラウン環礁→トラック→ブラウン環礁→トラック→ブラウン環礁→トラック→ブラウン環礁→トラック→ラバウル→ルトオット→トラック→呉

資料

